

「女性語」を多用する男性は「おかま」か

鈴木 千寿

1 はじめに

修士論文のための、テレビドラマを資料とした調査を進めていく過程で、男性語を多用する女性はいるが、女性語を多用する男性は、役名に「おかまの」が付くという事実にてであった。「女性語を多用する（一見）女性的な男性」という存在は、テレビドラマの中に見つけることが非常に困難であり、人によっては「やや女性的である」と感じるような男性でも、男性語と女性語を極端な片寄りなく使用しているという程度であった。

なぜ、男性は「女性語」と「男性語」の混用程度にとどめるのか。更に、その程度の使用をする男性でも（テレビドラマの中で）見つけることがこれほど困難なのはなぜなのか。なぜ、従来女性語とされていたものを多用する男性はおらず、そうすると「おかま」というジェンダーを逸脱した存在のように見なされるのか。なぜ「男性語を多用する男性的な女性」という存在が一応認められ、例えば「おかま」に当たる女性の名称で呼ばれたりしないのか。

これらについて考えるために、生物学的には男性である人間が、文化的社会的な性つまりジェンダーとしての男性の枠を逸脱したふるまいをした場合について、また、生物学的には女性である人間が、ジェンダーとしての女性の枠を逸脱したふるまいをした場合について、日本での状況に限って考察していきたい。

2 原因として考えられること

2.1 男性的な女性が存在する一因

まず、「男性的な女性」というのは、少なくとも「女性的な男性」よりは社会的に認められていると考えられる。

福富（1985）は、社会通念としての男性役割のほうが、「知性」や「活動性」といった社会的成功に結びついたものであるため、社会通念としての女性役割よりも高い評価を受けているととらえている。

つまり女性は、男性役割の特性である「知性」や「活動性」などを求めると、「男性的」であるという評価は免れないかもしれないが、一人の人間として社会的な成功をおさめる可能性があるため、むしろ意図的に「男性的」であるという評価を受けようとする者がいたとしても納得がいく。

また、たとえそれが結果的に社会的な成功につながらなくても、評価の低いものが高いものを目標にするということは向上心があると見なされるために、評価の高いものがその維持に努めず低いほうに向かっている「女性的な男性」よりは、「男性的な女性」のほうが認められやすいのだと考えられる。

社会的に認められていれば、女性はたとえ「男性的」であると見なされても、それが自分の意向と異なっていればそう見なされないように努力することも可能だし、「男性的な女性」であるというのは自分の特性であると認めて生活することも可能だというように、選択できることになる。

2.2 女性的な男性が少ない一因その1～成長過程において

一方、男性にとって「女性的」であると見なされることはどうだろう。

福富（1985）は、子供のときに「女のようだ」と評価された男の子は、「男のようだ」と評価された女の子より心理的痛手が大きく、「自分の存在を全面的に否定されたことにも通じる、苛酷な事態として受けとめかねない」（p. 98）と述べている。そしてこれも、社会通念としての男性役割のほうが高い評価を受けていることの反映ととらえている。

伊藤（1996）は、日本は「社会的には『男女平等』が公然と叫ばれながら、他方で、『男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく』という、性によるステレオタイプがまだまだ根深い社会」（p. 24）であると述べている。その根拠として、1992年の東京都生活文化局の『女性問題に関する国際比較調

査』から「子どものしつけ方」に関する国際比較をひいて (p. 97)、日本が「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てたい」と回答する割合がきわめて高いことや、1994年の総務庁「第五回世界青年意識調査」の「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という意見に賛成する若者の割合が、世界10カ国のうち、ロシア、フィリピンに続いて上位3番目であることを指摘しているが、1998年1月3日付で総理府が発表した「男女共同参画社会に関する世論調査」でも、『男は仕事を優先し、女は家庭に責任を持つ』とする男女の役割分担意識が結婚観の多様化、女性の社会進出が進んでいる現在も依然として根強い」(中日新聞1998. 1. 4)とあり、現在でも状況はさほど変わっていないことを示している。

さらに伊藤(1996:23-24)は、大学生に対して「あなたは、自分を“男らしい”あるいは“女らしい”と思うか? また、それぞれの理由も書きなさい」というアンケートを行なった結果、女子学生は、「女らしい」と答えた者も男性中心社会の中での女性の位置を見つめたいうでの生き方の選択であったり、「女らしく」ではなく「自分らしく」生きたいというように、自分たちのかかえこんだ性を客観的に相対化して考えているのに対し、男子学生は、「男らしい」と回答した者も「男らしくない」と答えた者も、〈男らしさ〉へのこだわりから抜けきっていないことがわかったと述べている。これは、「この二〇年あまりのうちに登場した社会構造の変貌や、それにもなう価値観の変容にもかかわらず、〈男らしさ〉に代表されるステレオタイプ化した『ジェンダー意識』が、女たちはともかく、少なくとも男たちについていえば、まだまだ強固に残っている」ということで、「表面的には一見『軟弱』に見える男子学生も、その心の深い部分では、けっこう親の世代と同様、古いタイプの〈男らしさ〉へのこだわりをもっている」、つまり、生活スタイルはもはやそれほど「男らしく」ないのに、内面的には、まだ古い〈男らしさ〉の神話に縛られているということを指摘している。

2.3 女性的な男性が少ない—因その2～成人男性に対する世間の目

女性の場合、「女性でありながら男性的」というあり方が可能であったのに対し、男性は、「男性でありながら女性的」というのは多くの場合認められない。心理学者である渡辺（1986:217）は、「性別役割から逸脱した行動を取れば現代社会では男性の方がより厳しく罰せられるという、性別二重基準」が存在するという。男性は、女性からの「性差別」という言葉により、原則として、男性の領域の門戸を開いたのに、男性が女性の領域へ越境しようとする「性倒錯」といわれるという点を指摘して、「男性にとって女性の領域とは、いぜんとして閉ざされた聖域であり、女性から男性への越境は《権利》なのに、その逆はタブーの侵犯（原文傍点）という意味を失ってはいないということなのだ」（p. 110）と述べている。そして、このタブーに「近代人男性における反アンドロジナス・コンプレックス（原文傍点）」（p. 115）という名を与え、「近代的倒錯概念の機能と本質は、男性が女性を兼ねるという事態を防止するところにあつたのである（原文傍点）」（p. 114）と主張している。

3 「おかま」とは

3.1 男はなぜ女装するのか

男性は、「男性でありながら女性的」ということが認められないにもかかわらず、いやむしろ認められないからこそ、女装する。

渡辺（1986:12-16）は、「無意識の世界では、一般に男性の方が女性よりも強い異性羨望を秘めている」というのが、「近年、精神分析的に指摘されている意外な事実」であるという。さらに、男性の女性羨望には、このような「社会的な意味での女性役割への羨望にとどまらない、言わば生物としての『女性』そのものへの羨望」というべき部分があることを指摘し、これらの羨望の背景に想定されるのが、「生命を産出するという、おなじみの女性の特権への、個人心理の域を超えて人類という種の中で連綿と受け継がれてきた畏怖と羨望の集合的コンプレックス」であると述べている。そし

て、この「女性コンプレックス克服のための男性の活動の最たるものが、文明の創造だったのかもしれない」という。できあがった文明社会は、例外なく男性優位社会、つまり女性羨望を意識せずにするのに都合のよい社会だったが、「男性優位社会の崩壊にともない、女性コンプレックスを抑圧することに失敗し、男性性がぐらつき、女性に対して恐怖を抱いたり（同性愛）、羨望して女性を装ったり（異性装嗜好）する男性が激増している、というのが目下の状況」であると指摘している。

伊藤（1993:76-77）は、「女性コンプレックスから生じた伝統的男役割からの逃亡の道」には二つあり、一つは異性装嗜好者などのように「男とは違う性へと自分を変える道」、もう一つは「女性を完全に排除した『マッチョ（男性至上主義）の道』」であるという。「ゲイや異性装趣味者、変性願望者などに代表される人びとの一部に、強いられた伝統的男役割からの逃避が含まれていることは明らか」と述べ、「いずれにしてもヘテロ的（異性愛的）関係からの脱出」ととらえている。

しかし、「異性装」を実行にうつした男性が直面したのは、「女性はどんどん伝統的な男性の領土に侵入していつているのに、男性はなかなか女性の領土に侵入できない。その象徴的な例がファッションなので、女性はズボンをはいてもよいことになっているのに、男がスカートをはくと、異常視されてしまう」（渡辺1986:21）という問題であった。

3.2 人間の性（セクシュアリティ）とは

「異常視されてしまった」男性のテレビドラマの役名には「おかまの」と付いていた。辞書（『広辞苑』第四版）によると、「尻（しり）の異名。転じて、男色。また、その相手」とあるが、「おかま」とは一体どういう人を指すのであろうか。

これについて考察するために、まずは「性」という言葉がどのようにとらえられているかをみていきたい。

日本語で「性」というと、「セックス」も「ジェンダー」も「セクシュア

リティ」も含まれているように感じられるが、この節では、人間の「セクシュアリティ」に焦点を当てる。上野（1995:871）によると、「セックス」「ジェンダー」「セクシュアリティ」の違いは、

「生物学的性差、つまり性染色体やホルモン、外性器の違いによって区別する男女の違いをセックスというのに対し、ジェンダーとは、文化的社会的な性差をいう。セックスが連続的な差異であるのに対し、ジェンダーは厳格な性別二分法に基づいている。セクシュアリティとは、こうした性的差異、性的志向、すなわち性的対象選択や性に関連する行動、傾向等を総称するもので、これも本能ではなく文化の産物と考えられている」

と説明されている。

伊藤（1996:157）は、「セックス」を「生物学的な性（のあり方）」、「ジェンダー」を「文化的・社会的・心理的な性（のあり方）」、「ジェンダー・アイデンティティ」を「性についての自己認知」と定義した上で、「少なくとも性という問題は、『セックス』、『ジェンダー・アイデンティティ』、『性的指向性』という三つの視点から考える必要がある」（p.162）と述べ、これを「男／女」という「最も単純な二元モデル」で組み合わせても、細谷実（1994）『性別秩序の世界』からひいた八つのタイプの分類になる、という。

（以下の図）

	生物学的性別（X軸）	性的自認（Y軸）	性的志向（Z軸）
1	男	男	男
2	男	男	女
3	男	女	男
4	男	女	女
5	女	女	女
6	女	女	男
7	女	男	女
8	女	男	男

（*筆者注：細谷の図の引用では「性的志向」となっているが、伊藤自身は「性的指向性」という語を使っている）

これを、「カミング・アウトしているゲイ」である伏見（1991:207）は、

「性器」と「性的指向性」と「〈制〉別表現形式」によって、やはり八つの「セクシュアリティ」に分類している。(ただし「本書使用上の注意」に「本書の中でゲイについての論及は、すべて一人のゲイとしてのぼく個人の見解です。ゲイ全体の共通した見解ではありません」という断わり書きがある)

伏見のいう「性器」は「(その) 区別によって言語的に確認される性自認」であり、「自分が『男である』『女である』というアイデンティティ」(「用語解説」)である。また、「〈制〉別表現形式」は「それぞれの性別^{セックス}に期待される、ジェンダーとも言われる社会・文化的役割、思考・行動型」(「用語解説」)である。そして、〈男制〉と〈女制〉の間には明確な色分けや境界が存在しているわけではなく、ある種の傾向におけるインテンシティー(強度)の違いであって、男だからといって〈男制〉を、女だからといって〈女制〉を、100%内面化するということはないという。またここでは「バイセクシュアル」を考慮から外してある旨が述べられている。以下に伏見の分類を掲げる。

オス 〈男性—ヘテロ—男制〉	メス 〈女性—ヘテロ—女制〉
オス 〈男性—ヘテロ—女制〉	メス 〈女性—ヘテロ—男制〉
オス 〈男性—ホモ—男制〉	メス 〈女性—ホモ—女制〉
オス 〈男性—ホモ—女制〉	メス 〈女性—ホモ—男制〉

このように、伊藤、伏見、それぞれの三つの視点は完全には一致していない。特に、伊藤は「生物学的性別」と「性的自認」を別の項目にしているが、伏見は、(伊藤の用語を借りると)「性的自認」は「生物学的性別」により言語的に確認されるものとのとらえ方をしている点が最も異なっていると言える。しかし人間の性というのは、少なくとも「男」と「女」の二つだけには分類できそうにないという点で両者の見解は共通している。

これらの分類で見ると、いわゆる「普通の」男性と女性は、伊藤の分類では「生物学的性別」と「性的自認」が一致して「男」または「女」で、「性

的志向」がそれではないほうの性、つまり異性であるとする2と6にあたる。伏見の分類では、〈男性〉で〈ヘテロ〉で、〈男制〉を100%とはいわなくても〈女制〉よりは多く内面化している人、また〈女性〉で〈ヘテロ〉で、〈女制〉を〈男制〉よりは多く内面化している人といえるであろう。

では、「同性愛者」というのは、どこに位置するのであろうか。そう考えてこれらの図を見ると、それは、「外から見た限りでは判別が不可能である」ということに気がつく。伊藤の例で見ると、「生物学的性別」が「男」で「性的指向」が「女」である2と4でも、「性的自認」が2は「男」で4は「女」であるので、2は意識の上でもヘテロセクシュアルであろうが、4は意識の上ではホモセクシュアルである可能性がある。伏見の例でも同様である。〈男性〉で〈女制〉を100%内面化していても〈ヘテロ〉ということがあり得るということを見せてくれる。

ここで、これまで使用してきた「同性愛者」という言葉は、妥当なのだろうかという疑問が起こる。まずは、当人である伏見(1991)を参照すると、「ゲイとホモとオカマってどう違うんですか？」(p.10)という質問に対して、きちんと言葉で定義されたことがないので、それぞれ勝手に使っているが、どれも大した違いはなく、個人的にはゲイとかホモセクシュアルという言葉を使っている、と答えている。そして、彼にとって「ホモ」はちょっと暗くて変質者のイメージが強く、「オカマ」には「トランスセクシュアルや女装嗜好のニュアンスが感じられる」と述べている。また、Weeks(1986)によれば、「ゲイ」という言葉について、“the wide spread emergence (at first in America) of the self-description ‘gay’ in the 1950s and 1960s” (p.78) と述べられている。以上を考慮し、本稿では以後、男性の同性愛者に対しては「ゲイ」という言葉を用いることにする。

ただしこの「ゲイ」という語を、日本語に訳すと「オカマ」とか「変態」とされがちであるが、「その否定的なレッテルを逆手にとって、『オカマ』性や『変態』性を肯定していこうという思想のもとに掲げられた呼称」(クィア・スタディーズ編集委員会編1996:5)である「クィア (queer)」も、最近では「レズビアン/ゲイ」という言葉と併用して使われているようだ。松

尾 (1997:12)はこの言葉を次のように説明している。

クエア (queer)…日本語ではクエアとも書く。直訳は「おかま」「変態」。もともとはゲイやレズビアンたちの中から生まれてきた言葉だが、ゲイという言葉自体がレズビアンたちに用いられにくかったことと、近年、ゲイやレズビアンたちも人種、民族、性的嗜好などの位相の違いでますます多様をきわめてきており、総体としての言葉が必要になってきた。そこで使い始められたのがクエアという言葉である。

そして、「クエア」は「これまで社会の中で、“ノーマル (まとも)” とされてきた路線から自分は逸脱していると自覚的であることを指」すと述べている。

しかし、「日本で (原文傍点) 生まれ育った男性同性愛者は、(国籍を問わず) 誰もがオカマ文化を背負うオカマにほかならない。いくらゲイだのホモだのと言ったところで、それは借りたものにすぎない」(クエア・スタディーズ編集委員会編1996:108) という意見もある。

3.2 テレビで「おかま」といわれる人について

それでは、テレビで「おかま」といわれる人たちに関しては、どのように考えればよいのだろうか。『広辞苑』にも「男色」という記載がなされていたが、前述のように、本人が表明でもしないかぎり「ゲイ」かどうかはわからないということがある。それにもかかわらず、テレビには一般に「おかま」と呼ばれる人が溢れている。それはどういうことなのだろうか。手がかりの一つは「動くゲイとレズビアンの会」が発行した「同性愛報道の手引き」にあるように思われる。それには「おかま」について以下のように述べられている。(湯浅・武田1997:pp. 310-311)

おかま 男性同性愛者を表すことばとして使われている。男性同性愛者

を、揶揄、嘲笑、侮蔑する文脈の中で使われることが多い。「あいつ、かまっばい」「おかま米兵殺人事件」など。

『広辞苑』によれば、「かま」は肛門の異名。男性同性愛者を、肛門性交をする者にとらえるところから生じた名称。人間を、性行為の姿態で呼び捨てることは、極めて侮蔑性が高い。また男性同性愛者に肛門性交を結び付けることも、必ずしも根拠がない。

女装をする男性や、柔和な口調・物腰の男性を表す場合にも使われることがあるが、異性装や、口調・物腰と、その人の性的指向とは、本来、関係がない。

このように、「おかま」という言葉は、極めて多くの問題を孕んでいる語である。

伏見も、「オカマ」には「トランスセクシュアルや女装嗜好のニュアンスが感じられる」（前掲書：10）と述べていたように、「おかま」は、性的指向とは必ずしも直接結びつくとは言い難い「服装」や「口調・物腰」といった、外からわかる要素が結び付けられて用いられる場合があるようだ。テレビに登場する「おかま」といわれる人は、まさにこの「外からわかる要素」によりそう呼ばれていると考えられる。

この「外からわかる要素」を薦森（1993）は「^{ジェンダー・アトリビューション}性別の見かけ」とよんでおり、「人が、男にみえる、女に見える、といった服装を含む身体や容貌のこと」（pp. 206-207）であると述べている。そして、「性自認、ジェンダー・アンデンティティの証しがジェンダー・アトリビューションなのではない。ジェンダー・アトリビューションが性自認そのものなのだ」（p. 209）というとらえ方をしている。

また、同様によく混同して用いられる語に「ニューハーフ」があるが、松尾（1997:19）は、1980年代初頭に、銀座のホステスで「男性から女性へ性を移行した松原留美子があまりにも女、そのものの人物だと注目し、それまで流布していたブルーボーイとかオカマの呼称に代わりニューハーフという呼び名が彼女に付けられた」と述べている。

松尾（1997:22）は、性転換がセクシュアリティに因るのでなくジェンダーの問題ではないかと直感したことから、「世間や私たちマスメディアに携わる者は、いかに『ジェンダー・アイデンティティ（性自認）』と『セクシュアル・オリエンテーション（性的指向）』を混同して『性転換者』と『同性愛者』を結びつけていることか」という指摘をしているが、当事者である「ニューハーフやおなべと称され、性については何らかの確信を持っているように思われる人たちもまた、我々の社会の無知をそのまま反映していて、自らの性の存り様を整理できずにいる者は多い」（松尾1997:70-71）という。まさにこれこそが「おかま」が「ゲイ」と『ジェンダー・アトリビューション』が女性である人」という両方の意味をもつようになってしまった原因ではないかと考えられる。

3.3 ジェンダー・アトリビューションについて

3.3.1 「異性装指向」ということ、特に「女装する」ということ

これまでみてきたように、「ゲイ」であるということと「女装する」ということは別の問題である。「ゲイ」であるということは「性的指向性」の問題であり、「女装する」ということは、伊藤（1996:160）が述べているように「自己の性的表現」つまり、自己表現の一種であるからだ。

上野（井上他編1995b:5）も、以下のように述べており、「女装者」を「ゲイ」や「性転換者」とは区別しているが、そのとらえ方はむしろ批判的である。

「女装者の性自認（ジェンダー・アイデンティティ）は男性として安定しており、かれらはしばしば結婚のような慣習的な性関係を女性と結んでいる。性転換者のように性自認の混乱や危機を覚えているわけではない。女装者は女性の美を羨望する。かれらは性別二元制に何らかの不適合を覚えているが、それから降りようとするわけでも、性別秩序を変えようとするわけでもない。男性としての利益は享受しながら、一時的な代償行為をとっている人びとである。結果としてかれらは性別秩序の維持に

貢献する」

しかしながら伏見 (1991) は、「ゲイ＝〈女制〉的というのは俗説で、ゲイにも〈男制〉的なもの、そうでないもの、個人差があります」(p.199)と断わりながらも、その「多様なゲイの中に、一方で〈女制〉性というものが万国共通確実に附随しているという事実」があり、「〈女制〉を内面化していると思われるものの割合は、ヘテロの男の非ではありません」と述べ、ゲイの「〈女制〉性」についても一応肯定している。一般に、ゲイの多様性は見落とされがちで、つい短絡的に「ゲイ＝女性的＝女装」などという結び付けをしてしまいがちなのは、そういった理由によるものであろう。

性別の境界線を越えようとする人たちのうち、「女装者」つまり「異性装者」は「トランスヴェスタイト」、「性転換者」は「トランスセクシュアル」とされている。松尾 (1997:10-11) の説明によると、次のような違いがある。

トランスヴェスタイト (Transvestite/TV) …反対の性の服装や性役割をパートタイムで身に着ける人たち。なお、トランスヴェスタイトは精神医学側が作った言葉なので、これを嫌うTVの人たちは、近年、クロスドレッサー (Cross-Dresser) と自らを名づけている。

トランスセクシュアル (Transsexual/TS) …身体の性 (sex) と個々が自己認知する性 (gender) が一致せずに、「自分が何者であるのか」(identity)を生得上の身体を外科的処置により変えることなしには、すんなりと表現できないケース。

そしてこの他、「トランスジェンダー (Transgender/TG)」があり、これは、身体の性と個々が自己認知する性が一致せず、「自分が何者であるのか」を表現するために肉体を自己認知する性へ近づけたいことは「トランスセクシュアル」同様だが、そのためのホルモン摂取は必要な人も不必要な人もおり、また、ホルモン摂取の必要な人、不必要な人、両者共通して性転換手術までは考えていない点が「トランスセクシュアル」とは異なる。

渡辺 (1986:6-7) は「異性装嗜好者」について、「しばしば異性の装いを

する精神的必要を覚える人」で、「俗に言う女装癖の男性のこと」であり、彼らは、「たえず女性を羨望」していると述べている。渡辺は「常習的女装行為」を、「変性症の女装」「フェチシズム的女装」「異性装嗜好／アンドロジナス型異性装」「同性愛異性化型的女装」に分類してとらえており(p. 224)、「異性装嗜好者」はその中の一つということになる。一つ一つには違いがあり、例えば「フェチシズム的女装」と「異性装嗜好」も分けて考えているが、「女装の悦びとは、帰するところ、内なる女性の自己実現の悦びであって、性的快感といえどこの悦びの一面に他ならない」ので、「女装で性的興奮を覚えると否とにかかわらず、女性的部分人格に自己表現させるべく女装するすべての女装者に、トランスヴェスチズムの名を与えるべき」(p. 223)とも述べている。

3.3.2 「オネエ言葉」について

「女装」というと、「女性の服装」を想定しがちであるが、男性が女性を装っていると外からわかるのは、服装に限ったことではない。テレビに出てくる「おかま」と言われる人、といって「おすぎとピーコ」を思い浮かべる人も少なくないだろうが、彼らは「服装」に限って言えば「女装」していない。にもかかわらず、「おかま」のレッテルに視聴者も納得するのはなぜだろうか。彼らは言葉遣いで「女装」しているからではないだろうか。そこで次に、いわゆる「オネエ言葉」といわれるものについて考えてみたい。

伏見(1991)は「〈オネエ〉というのは単なる女っぽさとは違う」(p. 21)という。内面化された〈女制〉の延長にあるのはたしかだが、もっと演出的で、〈女制〉のもつある種の特徴を「グロテスクに誇張したパロディ」であると述べる。その特徴として、例えば「他者依存的で無責任、物事の評価を好き嫌いの感情で主観的に下す」などを挙げており、〈オネエ〉の会話が似ているのも、ゲイバー文化の中でつくられた伝統的な表現形式、つまり、「無責任で偽悪的な女」の演出だからなのだとして述べている。「オネエ言葉」は、女性語の一種であると考えられる。そうであるとすれば、「オネエ言葉」も、

女性語のある種の特徴を「グロテスクに誇張したパロディ」ということになるであろう。

また伏見（1991）は「ゲイの人はみんなオネエ言葉を話すんですか？」という質問に対して、ゲイ＝〈女制〉的というのはステレオタイプの思い込みにすぎず、ゲイの中にも、マッチョなタイプ、ふつうぽいタイプ、様々いるが、ヘテロの男に比べて〈女制〉的なタイプが多いのも事実なので、ゲイ＝〈女制〉的という偏見をもたれる状況はある、ととらえながらも、「ただそれによって不快を感じているゲイも多い」と述べている。つまり、ゲイだからといって全員がオネエ言葉を話すわけではないということだ。

しかし大塚隆史（クィア・スタディーズ編集委員会編1996:50）は、「オネエ言葉が女の言葉でないように、ドラッグは女の真似をすることではない」と述べる。どちらもゲイにとって、「ジェンダー・イメージを押しつけてくる社会に対して腐ったタマゴを投げ付ける行為であり、男と寝るという“最も男らしくない男”が、『男でないもの＝女』の構図を借りて、日頃の重圧感を笑い飛ばすための表現」であり、オネエ言葉はその表現の日常的な、ドラッグは非日常的な部分を担っていると述べている。「ドラッグ」について、松尾（1997:13）は以下のように説明している。

ドラッグ（Drag）…直訳は「引き摺る」という意味。性の越境を誇張しながら確信的に演出すること。ドラッグ・クィーンはフェミニン性を過剰に強調して演ずる者。ドラッグ・キングはマスキュリン性を過剰に強調して演ずる者。

（*筆者注：「ドラッグ」と「ドラッグ」はカタカナ表記の違いである。大塚は“Drag”を「ドラッグ」、松尾は「ドラッグ」としている）

蔦森（1993:232）は、「DNAはオス」である人物が書いた女装専門誌への投書を掲載するときの困難さを指摘した後、「彼女たちが自己とイメージを安定させる文体は、通常の女性誌をもう少し〈女っぽく〉誇張した言葉遣い—誇張しすぎると、女ではない別のものになってしまう—にした、プライ

べートな語り口に限られる。オフィシャルな語り口は彼女たちの感じる男のスタンダードでもあり、イメージが成り立たないからだ（原文傍点）」と述べている。

3.5 女性の「おかま」はいるか

それではなぜ、女性は「おかま」のような呼ばれ方をしないのだろうか。テレビドラマで、「生物学的にもジェンダー・アトリビューションも女性だが、従来男性専用語とされていたものを多用する人」が、「男女（おとこおんな）」と呼ばれた例はあった。しかし、それはあくまで「男のような女」のことであり、「女」を否定されたわけではない。

「オナベ」という言葉もあるにはあるが、『広辞苑』にも、前述の「同性愛報道の手引き」の「用語の解説」にもその掲載はない。松尾(1997:21)は、「オナベとは、オカマという言葉を手逆に取り、割れ鍋にとじ蓋の発想で出来た言葉だ」と述べている。

松尾(1997:64)によると、「オナベ・バー」は「かつて男装バーともいわれ、宝塚歌劇団や松竹歌劇団（SKD）の男役のイメージでスタートしたのがそもそもの始まり」という。ここで、現代において、男装というのは成り立つのだろうかという疑問が起こる。「ひげ」はそれを可能にする一つのアイテムではあるだろう。「つけひげ」をしている女性は男装といえるかもしれない。しかし、それ以外にはどうだろうか。スーツもネクタイも、もはやありえないものではない。現代のファッションの世界では、「ボーイッシュ」も「マニッシュ」も特別なことではなく、それはむしろ、女性のもつ美しさを強調するともいわれる。もっとも、オナベ・バーで働く人にしてみれば、女性用と男性用ではジャケットの胸のダーツやズボンのウエストのタックなどが全く違う、ということにもなる。けれども一見してわかるようなことだろうか。女性は、男性の服装をしたとしても、「逸脱」とは扱われないのだ。もちろん、「一八五〇年代アメリカにおいて、今日少女の体操服にのみ名をとどめているブルマー夫人らが婦人服改良運動の烽火をあげ、トル

コ風のズボンをはき始めた当時、彼女らも同種の非難を浴びなければならなかった」(渡辺1986:117)し、「かつては、現在よりも多数の男装趣味者が存在した (原文傍点)」という。しかし、「近年では、(レズビアン)の男役でもそのようなタイプは消滅しつつある(括弧内筆者)」(渡辺1986:224-225)という。だからこそ「オナベ」と呼ばれる人たちはトランスヴェスタイトにとどまらず、トランスジェンダー、さらにトランスセクシュアルとなり、いきおい、意味の範囲も「おかま」に比べるとかなり狭くなる。こう考えると「同性愛報道の手引き」の「用語の解説」に掲載されないのも当然であると納得がいく。「おかま」は「ゲイ」の意味を含んでいたが、「オナベ」は「レズビアン」の意味を含んでいないのである。

ジェンダー・アトリビューションという観点では、「男性的な女性」という存在が認められるばかりでなく、「女性的な女性」というのももちろんあり、また、一人の女性が、あるときは「男性的」またあるときは「女性的」ということも十分ありうるのだ。つまり女性は、時と場合によりアトリビューションを巧みに使い分けているといえる。

渡辺(1986:13)は、「女性の男性羨望は意識のより表層近くにあって意識されやすく、それゆえ強く意識されたとしても彼女の女性性全体が崩壊するようなことはまずない」ことを指摘している。そして、「男性羨望のあげく男に化けてまで戦場に出てゆくような女性は、今の世にはあまり見つかりそうもない」(p.225) ことの理由として、次の三点を挙げている。

- 1 「現代の女性は、～中略～、正々堂々「女として」軍人たることを要求するだろう」という点
- 2 「今の女性には、社会のいろんな領域で男性と競い、人格の男性的部分に自己表現させる機会に恵まれている」点
- 3 「かつての軽騎兵だの竜騎兵だののような男性の魅力あるコスチュームというものは、ドブネズミ背広族に支配された今日のサラリーマン社会には存在しないし、またたとえあったとしても、女性はすかさずそれらを、自らのファッションの中に取り入れてしまうだろう」という点

更に、「今日女性は、服装のみならず、他のあらゆる面で♀→♂性別越境運動を成功させつつあるが、その結果、当初一部で懸念されたようには根元的な女性性を失いはしなかった。むしろ、男性羨望を超克することによって彼女らの女性性は、より安定した。現代の女性は、一部で誤解されているように男性化したのではなく、男女両性具有化したのであり、歴史的に男性が占めていたアンドロジナスとしての役割に、完全に取って代ったのである」（渡辺1986:181）と述べている。

4 最近の変化と今後の展望

4.1 「フェミ男（くん）」という現象

しかし、ファッションの世界では、ごく最近になってまた変化が現れた。渡辺（1986:115）も「女性の、より多用で自由、かつ審美的感覚にもかなう服装への憧れと羨望は、今日の少年たちの間には、かなり普遍的にひろまっている感情らしい」と述べているように、男性が「女性的」な要素を取り入れる傾向がかなり一般的になってきているのだ。いわゆる「フェミ男（くん）」といわれる男の子のファッションのことである。「フェミ男（くん）」とは、

「ほっそりした体にピチピチのTシャツ、すそ広がりパンツをはいた、やさしげで、女の子の雰囲気漂う男性、というのが週刊朝日（七月一日号）の特集記事の定義。その生態は、もみあげを伸ばした短めの『おサル髪』にベレーやキャスケットなどの帽子をかぶる、体にぴったり貼りつくようなTシャツ、自分の体形よりサイズ一つ小さめをぴたぴたに着る、これにシースルーやアミの薄物を重ねたり、丈を短くして下からシャツをのぞかせたりする、ピアスやネックレス、指輪などのアクセサリも大好き、眉を描いたりアイラインを入れたりメイクもあり、なで肩、やなぎ腰のすらっとした体型。流行は全国規模」（1995『現代用語の基礎知識』）といった現象であり、服装の男女差、つまりジェンダー・アトリビューションの差が、なくなりつつあることを示している。

伊藤（1996）は、男性学の観点から、この現象には三つの要因があるとと

らえている。第一に「重々しい〈男らしさ〉からの自由」という要因、第二に「女性の視点」という要因、そして第三に「〈男らしさ〉という点でハンディを背負っていた小柄な男の子の自己表現」という要因である。

第二の「女性の視点」とは、つまり、女性たちに「中性的な男の子を好む」という文化が存在することをうけて、そういった女性たちにもてたいという気持ちが“フェミ男くん”の要因になっているというのである。伊藤（1993:91-96）はこれを、1970年前後を境に全世界規模で登場した、産業社会から「ポスト産業社会」への変化が背景となっているととらえている。男性的な肉体の価値の象徴であった力（筋力）の強さが、ますます不必要になってきていることに関連して、女性がそれに対してかつては感じていた魅力も、だんだんと薄れてきたということである。それに伴い、男性のファッション化の傾向も、「内面こそが男の価値をきめる」といった時代から、「でもやっぱり、外面も大事だ」、そして「身だしなみに気を配らない男は、女の子から好かれることはない」という時代へと変化してきた。70年代初頭には、この「身だしなみに気をつかう男たち」が大衆化し、先鋭的な一部の者たちだけの現象ではなくなった。そして、70年代から80年代にかけて、「男の子たちは、他者の視線を意識し、『愛される』ために、ますます外面に磨きをかけるように」（伊藤1993:94）なったという。

第三の「小柄な男の子の自己表現」に関しては、福富（1985:103）も、アメリカの心理学者コールとホルの『青年心理学』からひいて「身体の小きな女の子に対して、一般社会の偏見もないし、スポーツも男子ほどに重要視されていない」ので、女子は「服装その他でカバーすることにより、実際には他の仲間から十分認められる」が、男子の場合は困難であると述べている。しかし「フェミ男」現象は、これまでのそういった状況が変わってきてることを示している。

1998年現在、「フェミ男」という言葉は「風俗・流行語」の一つではなくなった。しかしそれは、この現象の終わりを意味するものではなく、そういったカテゴリーがもはや必要ではなくなるほど一般的な現象になったと解するべきであろう。男性が髪をのばし（「ロン毛」：「ロングな毛」つまり長い

髪のこと) 茶色にする(「茶髪」:^{ちやはつ}「茶色い髪」)の こと。茶色または赤茶色に染めたり、脱色した髪) ことは、今となつては特別視されるようなことではない。男性専門のピアス店もあるそうだし、フレグランスやスキンケア用品も含めた「男性用化粧品」もほぼ市民権を得たかのように感じられる。「メンズエステ」に至っては、

「男性専門のエステティックサロンのこと。若者だけでなく、四一五〇代の男性までジワジワと需要が増えている」(1998『現代用語の基礎知識』)

と記載されている。これらの現象に共通しているのは、やはり、「男は外見より中身で勝負」という時代はもはや過去のものであるという風潮であろう。

渡辺(1986)は、「将来、男性の服装革命が進展し、男性が、過度に禁欲的な服装、過度にステレオタイプ化した性別役割から解放されるならば、『服装倒錯』すなわち、変則性嗜好としての男子異性装嗜好も、次第に消滅に向かうことが期待されるだろう」(p. 228)と述べ、日本の女装者が、欧米に比べて20歳代の若い人が多いことを指して、

「一九八五年の日本では、特に若い世代に女装がさほど抵抗なく受け入れられ、非常な勢いで普及しつつあることの、一つの証拠なのではなかろうか」(p. 243)

と指摘しているが、その「男性の服装革命」ともいべき現象が、ここへきて更に進展を見せているといえよう。

4.2 男性芸能人の「女装」とテレビの影響

薦森(1993:249)は「男性ロッカーたちが『女装』を死語とした」と述べ、例として「XやBY-SEXUAL、COLOR、かまいたち、ローゼン・クロイツなど」といった「女装」した男性の音楽グループ(バンド)名を挙げているが、1998年現在での代表格は間違いなくSHAZNA(シャズナ)というグループでヴォーカルを担当しているIZAM(イザム)という人物であろう。イザムは、ジェンダー・アトリビューションは女性であるが、ジ

エンダー・アイデンティティが男性であること、そして、ヘテロ・セクシュアルであることはテレビで公言している。

彼らは、前節で述べた現象に、さらに追い討ちをかけそうな勢いを示している。便宜上「女装」という言い方を用いたが、蔦森も述べているように「ここで読みとれることは服装を含む身体表現がそのままその人のメッセージであり、そこに〈女の〉とか〈男の〉とかの Kategorie でくくる意味など全く感知されない」。彼らの姿はテレビというマスメディアにのり、多大な影響力を持って発信されるのである。

これらの現象が一時的な流行で終わってしまうか、それとも「革命」として定着するかの鍵は、これらを受け入れる側にあるのではないだろうか。鈴木（井上他編1995a:164）は、「テレビは現実を映す鏡の機能の他に、見る者の意識と価値観の形成に深く関与し、結果として、現実をつくりだす機能を合わせもっている」という。テレビが映す現実、番組をつくり送りだす側が、視聴率を、つまり「見る者」を意識した現実であるだろう。そして、共感にしる反感にしる何かを感じとり、何らかの影響を受けた「見る者」が現実をつくっていくのだから、「見る者」つまり「受け入れる者」の存在は重要である。

受け入れる側としての女性は、すでに「中性的な男の子を好む」という文化も指摘されていた。それは、上野（井上他編1995b:12）が、「家事・育児する男たち」を指して、『『二流市民』にドロップアウトする危険を冒す男たち』といているように、社会的な期待が高くない者ならでの歓迎だったかもしれないし、アンドロジナスとなりえた余裕からかもしれない。しかしどちらにしても、女性にはそれらを許容できる素地ができてるように感じられる。後は、男性だ。今のところ、男性的な女性に対しても、「逸脱」と見なされている男性に対しても、厳しい姿勢を見せているのは受け入れる側としての男性なのではないだろうか。「革命」を押し進めていく力ばかりではなく、受け入れる柔軟さも合わせないと、男性が両性具有化するのには難しいであろう。

5 まとめ

ジェンダー・アトリビューションという観点で、服装と言葉について取り上げた。「フェミ男」や「イザム」が男性であるというとらえかたをされるのに対して、服装に関しては、別段女装とも思われぬ「おすぎとピーコ」が「おかま」といわれる。また、例えば「ニュースの女」というテレビドラマで、長塚京三が演じていた弁護士はエプロンをつけて家事をしていたが、それでも役者も視聴者も、その弁護士は「男性である」というとらえ方であったろう。これはやはり言葉遣いの差ではないだろうか。言葉は男性であるということを持する重要なファクターであるように感じられる。言葉の方が服装よりもジェンダーの規範としては強いのではないか。

女性の場合、もし意図せずに男性語を多用してしまっても、「男性的な女性」であると見なされるだけなのに対し、男性の場合は、ジェンダーを逸脱していると見なされる可能性があるということを描いてきた。女性語を多用する男性は、今のところまだ、「おかま」と呼ばれてしまうのだ。「おかま」は男性同性愛者だけではなく、女装をする男性や口調・物腰が柔らかい男性をも指すというように「見かけ」が関わってくるため、例えばその反対語として女性を表わすと考えられている「おなべ」に比べて、意味の範囲がより広い。前掲の「同性愛報道の手引き」でも「侮蔑性が高い」と述べられているにも関わらず、一般の意識はそこまで至らない場合が多く、広く使用もされている。一方「おなべ」は、女性の男装が「逸脱」とまで見なされることが少ないこともあり、その意味はトランスジェンダーやトランスセクシュアルといった人か、またはそうでなくてもオナベ・バー等で働く人などに、ある程度限定されている。そして、女性の場合は、一人の人間が、あるときは男性語を多用し、またあるときは女性語を多用して、自分の中の男性的な部分を強調したり女性的な部分を強調したり、意図的にスイッチできるという環境もある。

女性の場合服装が先行していて、言葉も、男性のように「逸脱」とはとらえられないところまで来たのであるから、男性の場合も服装が変わりつつあ

ることは、言葉も、女性語を使用しても「逸脱」とはとらえられないところまでいく可能性があるといえる。「逸脱とはとらえられないところ」とは、つまり、あくまで当面は男性語を女性が、女性語を男性が使用するのが容認されるというレベルのものであるだろう。そのレベルまでなら、至る可能性があるということだ。しかし、それは将来的に「男性語」「女性語」がなくなる方向につながるということになると、まだ少し疑問が残る。

Weeks (1986:59) は、“they(‘masculinity’ and ‘femininity’ 括弧内筆者注) exist not only as powerful ideas but as critical social divides. We do it in different ways at different times but we all the time divide people into ‘men’ and ‘women’ .” と述べている。規範は依然として、それでもゆっくりと変化はしながら、残っていくのではないだろうか。もし、規範の上でも「男性語」「女性語」がなくなる可能性が、仮にあるとしても、それにはかなりの時間がかかることであろう。外に現われる実態だけでなく、外に現われてこない規範も考慮して、現状を認識していくべきだと考える。

参考文献

石井慎二編 (1988) 『別冊宝島85 わかりたいあなたのためのフェミニズム・入門』

J I C C 出版局

伊藤公雄 (1993) 『(男らしさ) のゆくえー男性文化の文化社会学』新曜社

…………… (1996) 『男性学入門』作品社

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編 (1995a) 『日本のフェミニズム7 表現とメディア』岩波書店

…………… (1995b) 『日本のフェミニズム別冊男性学』岩波書店

上野千鶴子 (1995) 「女性／男性問題用語」『現代用語の基礎知識』自由国民社

永六輔 (1980) 「オカマのことばはすばらしい」『月刊ことば』4ー4 英潮社

小此木啓吾 (1982) 『日本人の阿闍世コンプレックス』中央公論社

- 小此木啓吾 (1989) 『フロイト』 講談社
- 小田亮 (1996) 『一語の辞典 性』 三省堂
- 小谷洋平編 (1998) 『知恵蔵1998』 朝日新聞社
- 大原稯子 (1994) 「ドラマの方言」『日本語学』13-5 明治書院 pp.49-56
- 掛札悠子 (1994) 「レズビアンはマイノリティか?」『女性学年報』15 日本女性学研究会『女性学年報』第15号編集委員会
- 河合隼雄 (1990) 『こころの天気図』 毎日新聞社
- クィア・スタディーズ編集委員会編 (1996) 『クィア・スタディーズ'96 クィア・ジェネレーションの誕生』 七つの森書館
- 清水均編 (1998) 『現代用語の基礎知識』 自由国民社
- 蔦森樹 (1993) 『男でも女でもなく～新時代のアンドロジナスたちへ』 勁草書房
- 深川章編 (1995) 『現代用語の基礎知識』 自由国民社
- 福富譲 (1985) 『らしさの心理学』 講談社
- 伏見憲明 (1991) 『プライベート・ゲイ・ライフ』 学陽書房
- 松井やより・若桑みどりほか (1996) 『フェミニズムはだれのもの?』 増進会出版社
- 松尾寿子 (1997) 『トランスジェンダリズム 性別の彼岸』 世織書房
- 湯浅俊彦・武田春子 (1997) 『多文化社会と表現の自由～すすむガイドライン作り』 明石書店
- リリアン・フェダマン／富岡明美・原美奈子訳 (1996) 『レズビアンの歴史』 筑摩書房
- 渡辺恒夫 (1986) 『脱男性の時代—アンドロジナスをめざす文明学』 勁草書房
- Weeks, Jeffrey. 1986. Sexuality. Routledge. (上野千鶴子監訳1996『セクシュアリティ』 河出書房新社)
- 中日新聞 (1998. 1. 4) 「仕事したいけど女だから『家庭優先』45% 総理府世論調査」